

桑原武夫集

3

1950

1

1953

桑原武夫集

3

1950  
）  
1953

岩波書店刊行

桑原武夫集 3

第三回配本(全十巻)

一九八〇年六月一八日 発行

定価四〇〇〇円

著者 桑原武夫\*

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五  
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三三六四二二  
振替東京六二三四

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

## 凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには\*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

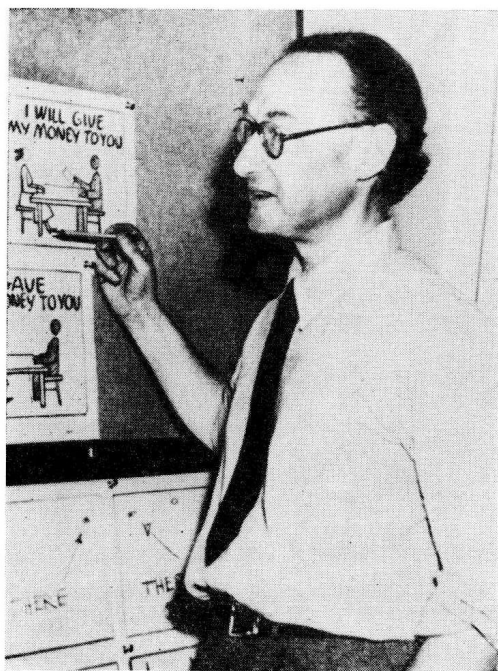
凡例

一五〇	文学入門	2
一五一	鷗外と不俗	160
	宛名のない手紙	172
	ジッドの死をきいて	204
	私の読書遍歴	216
	『ルソー研究』序言	220
	ルソーの文学	233
	伝統	288
	北海道断想	302

	鷗外の『高瀬舟』そのほか	318
	ヘミングウェイ『武器よさらば』	325
	あくまで平和を	336
	西洋文学研究者の自戒的反省	342
一九三	人間性の試金石	356
	今日における歌舞伎	363
	読書	384
	漢文必修などと	403
	文化遺産のうけつぎ	420
	丁玲における尖鋭さ	440
	アラン	443
	南方熊楠の学風	449
一九三	予想あそび	470

日本映画の成長	473
杜甫の『贈衛八処士』について	478
パスカルの時計のパンセの一解釈	493
『魯迅評論集』を読んで	502
みんなの日本語	505
家元制についての私的感想	519
外国人を招くことについて	525
伊東静雄の詩	537
三好達治の『測量船』について	547
文学とはなにか	553
自 跋	613
挿絵目録	635

1950



I. A. リチャーズ



## 文学入門

はしがき

一九四八年度の日本の全出版物(初版)中、文学書のしめるパーセンテージは、部数において一九・二、割当用紙において二四・二で、いずれも各部門中の最高位にある。また、その文学書がいて反復して読まれているかは、読者諸君が各自利用しておられる図書館について、その貸出率をきいてみられるがよい。文学が、今日の日本の社会で、いかに重要な地位をしめているかは、くわしく論じるまでもないであろう。文学は社会一般から、もつともつと問題にされなければならぬ。

私は、学生諸君、労働組合の人々、次代の日本人をあずかつておられる教員の人々とともに、お互いに社会人として、文学のいろいろの問題を考えようと思つて、この本を書いた。できるだけ解りやすくというのを念願としたが、私の無力のために、また問題の性質上やむをえなくて、むづかしいところもできた。しかし、それも一カ所にこだわらず、ほかのところと考え合せてもらえば、わかると思う。

この本は学者のために書いたのではないが、そのことは文学の専門家たちの批判をこばむことで

は、もちろんない。この本への批判が、もし日本に正しい文学理論をうち立ててゆく上に、少しでも役立つなら、私は大へんうれしい。

私はデューイ、リチャーズおよびアランから、多くのことを学んできた。しかし、この本を書くにあたっては、それらの本をなるだけ手許におかぬことにして、自分で合点のできているだけのことを書いた。この本の弱いところは私の弱さで、これらの学者たちの罪では決してない。

一九五〇年一月

桑原武夫

## 第一章 なぜ文学は人生に必要か

### 問題の重要性

文学は、はたして人生に必要なものであろうか？ この問いはいまの私には、なにか無意味のよう  
に思われる。私はいま、二日前からトルストイの『アンナ・カレーニナ』を読んでいるからだ。  
私がこの傑作に接するのは、おそらく四度目であろう。家庭教師のフランス女を誘惑したオブロン  
スキイが、怒る妻にわびる言葉——「あやまるだけだ……これまでの九年間（の忠実）が、数分間  
（の不貞）をあがなうことができないだろうか？」この「数分間」という言葉のもつ愚かしい露骨さ、  
したがってそれを聞いたときのドリーの怒り、そうしたことの意味さえとらええなかった少年時代  
から、平凡な生活をしてきたものの、多少の人生経験をへて、たとえば、「彼らが友人同志であつ  
て、食事を共にし、一そう互いの親しさを増さねばならぬはずの酒までくみかわしながら、めいめ  
いが自分のことだけを考えていて、相手のことは少しも思っていないかかったことを痛感した」という  
ような句を読むと、「食事のあとに起るこの接近の代りの分裂感」を経験したことが自分にも幾度  
もあると、実感をもつてうなずくような年ごろに至るまで、この『アンナ・カレーニナ』は、読み  
かえすたびに、いつも新しい喜びを私に与えてくれたのだ。レーヴィンはキチイと結婚し、アンナ

は鉄道自殺をするに決っているのだが、一々の描写のあとをたどるのが楽しく、読み上げるまでは、この原稿も書きしる。文学は人生に必要な、などということは問題にならない。もしこのような面白い作品が人生に必要でないとしたら、その人生とは、一たいどういう人生だろう！ この傑作を読んだことのある人なら、おそらく私とともに、そういいたくなるだろう。そして文学の傑作は、『アンナ・カレーニナ』だけではないのだ。

しかし、そうした私だけの、そしてそれに賛成される若干の人々だけの、直観のみでこの問題は片づきはしない。個々人の直観は無力である。戦争中のことを思い出してみるがよい。文学は人生に用のないゼイタク品と見なされていたのではなかったか？ さらに意味ふかいは戦争直前、外国の本の輸入が制限されたとき、科学書や哲学書は比較的寛大な取扱いをうけたが、ひとり文学書のみは全く輸入を厳禁された。私たちはヨーロッパ文学の本を註文するとき、わずかに丸善の番頭の好意によって、それを「言語学」(太平洋戦争を考えていた軍人どもは、各民族の言語を知る必要性だけはみとめていた)または「字引」の部に分類してもらい、もともと無知な当局をごまかして、時たま輸入に成功したくらいであった。ここで注意しておかねばならないことは、こうした不当な取扱いに対して、文学の必要性をつねに確信していた私たちが何の抵抗もなしえなかったことは恥すべきだが、同時に、民衆はもとより、文化の他の部門に属するインテリたちが、この文学の圧迫に対して反抗はもとより、同情すらほとんど示してはくれなかったという事実である。私はこの事

実を簡単に忘れえない。数年前まで、日本の政府と日本人の多数は、文学すくなくとも外国文学の必要性を認めてはいなかったのである。また自分の国の文学でも、柔弱な『源氏物語』や恋愛至上的な和泉式部や好色な西鶴、等々は国文学者のうちにすら、これを否認したような人があった。文学の必要性ということは、日本では敗戦のころまで、ほとんど認められていなかったのである。

海外でも、この大戦前のギリシャの独裁者メタクサスは文学を弾圧したが、そのさい例えばプラトンの『饗宴篇』はワイセツの理由によって禁書とされた。スペインのフランコ政権は、デユマの『椿姫』、フロベールの『ボヴァリー夫人』等々をフランス的柔弱の故をもって禁止した。ナチス・ドイツについてはいうまでもない。文学の蔑視ないし否認は、しかし、ファシズムのみに見られるのではない。プラトンは詩人を追放せよといい、カルヴァンは芸術を否定し、十七世紀フランスのカトリックの厳格派はラシーヌ、モリエール等の演劇をすら有害とし、パスカルも芸術を無用視している。二千年にわたり中国の指導的思想であった儒教が、詩や美的散文は認めしたが、小説などの民衆文学をいかに圧迫したかは、『三国志演義』を書いた羅貫中の一家は、罰があたって孫の代までオシが生まれた、などという説話が生じたことをみてもわかる。日本の徳川幕府もまた、そうした儒教を文教政策の中心においており、明治以後の歴代の政府も、自由にものを考える文学者などというものを、むしろなくもがな、と最近まで考えていたのである。

もっとも、敗戦後日本は文化国家になったのだから、文化の重要な一部門としての文学は当然尊

重されるのであって、もはや人生における文学の必要性などという問題に心を勞する必要はない、と考える人もあるだろう。しかし、そのように外的制度の変化のみによって、問題が解消したと考える人は、文学を当局のお目こぼしによって生きうるところの娯樂とする立場をまだ脱却していないのであって、もしまた外的情況が變ると、たちまち文学はゼイタク品にすぎぬ、などといいかねないところの人なのである。また文学に従事するところの人々、創作家も批評家も、自分たちの仕事に対する十分な自覚をもたないかぎり、ふたたびファシズムの時代にでもなれば、また戦争中の醜態をくりかえさぬとは、決して保証できない。ところが、なぜ文学は人生に必要か、という根本的な問題は、戦後自明のこととして素通りされ、真剣な解決の試みはほとんどなされていなく、うに見うけられる。しかも、これに対する解答——少なくともそれへの努力なくして、文学の正しいあり方、またその正しい受けとり方は考えられないのである。

文学一般というような抽象的なことをいうから、むつかしくなるので、具体的な作家と作品について考えれば、問題はない。シェークスピアの悲劇、ゲーテの詩、モリエールの喜劇、バルザックやドストエフスキの小説、これらが必要でないといえるだろうか、と聞きかえす人があるかも知れない。いかにも、と私は答える。これらの大作家の傑作が人生に必要なことは私も疑わない。また十七世紀のフランス人は、相当な人物も、シェークスピアを「粗野」として軽べつしていたこともあったが、現代の人々で、以上のような作品の必要性を否定する人は恐らく少数であろう。しか

し、すでにマラルメ、ボードレール、モーパッサン、ゴリキー等になると、難解、デカダン、ワ  
イセツ、共産主義、等々の理由から、これらが必要というのをはばかる人が、文学愛好者はともか  
く、一般社会人のうちには少なくないであろう。さらに、日本の現代作家A・B・Cなどという人  
人の作品が、はたして人生に必要不可欠か、と聞かれると、簡単な肯定はちゅうちょされる。それ  
どころか、近ごろの雑誌にのる小説を読んで、腹立たしくなることすら稀れではない。しかも、シ  
ェークスピア、ゲーテ以下、これらの好色的な雑誌文学にいたるまで、これすべて文学である。あ  
るいは、文学だということになっている。文学の必要性は簡単にきめられない。

美学や文学論の本を読んでも、美あるいは文学の本質といったことを抽象的一般論として論  
ずるか、または現実の作品から出発するさいも、その必要性の疑いえぬような最高傑作の讚美であ  
って、文学の必要性はいわば当然の既定のこととされている。それでは、一流の傑作以外の文学作  
品は、すべて無用あるいは不可避の悪と考えるべきなのだろうか？ よきものと悪しきものとは、  
歴史が裁きをつける。つまり個々の人間ないし一時代の民衆は過つことがあっても(たとえば、さ  
きの十七世紀フランス人のシェークスピアに対する態度のように)、ヒューマニテイ(全体としての  
人間)は究極においてあやまたない、という樂觀的な、そして恐らく正しい見解に立つにしても、  
それでは歴史的に評価のまだ定まりかねる現代——昨日今日でなく相当の幅をもった現代——の多  
くの作品の必要性は、どう考えるべきなのか？ しかもわれわれは有名な過去の古典的作品のみを

読んで満足してはられない。それで満足できるのはいわば世捨人であって、現代の社会人ではない。ところが、現実の問題として最も大切な、これらの点について、美学ないし文学論の名著の多くは、明答を与えてはくれないのである。そもそも明答をもらおうなどと思うのが、われわれの怠慢なのであって、めいめいで考えねばならぬのかも知れない。そこで私は私なりに、この問題について何ほどの答えを出すように試みたいと思う。

面白さという点

人々は何のために文学を読むのか？ 修養、教養、美意識の向上、趣味の向上、等々のため、と答える人もあろうが、そしてそれは偽りではなく、文学はそうした役目をはたしはするが、大多数の人々は、文学が面白いからこそ、強制もされないのに進んで読むのである。人それぞれによって、何を面白いとするかは異なるかもしれないが、このことは否定できぬ事実だと思ふ。じつさい、ある一つの作品について人が発する評価の第一声はいつも、この小説は面白い、あるいは、面白くない、という形をとることは、われわれが日常経験によって確実に知っていることである。私はフランスでも観察していたが、フランス人たちも、絵画、彫刻等の美術ないし音楽については、美しいとか、すばらしいとか、さまざまにいうが、文学作品の場合にはやはり多く「Intéressant——面白い」という言葉をつかう。描写がすぐれているとか、世界観が新しいとか、思想が深刻だとか、そういうことをいうのは、それからのことであって、文学ではまず面白い、面白くない、というのは注目



すべき点である。われわれはこの素朴な基本的事実を無視してはならない。ところで、こうした態度はまちがっているだろうか？ 人間的な人生を生きる人間は、社会のために働くと同時に、自分の楽しみをもつ権利がある。その楽しみを文学のうちに見出そうとすること、つまり文学に面白さを求めようとする事、そうした要求自体は何ら不健全なものではなく、むしろ正当なものとして認めねばならない（なお文学は、大都会以外に生活する人々にとっては、唯一の真正の芸術品だという事情を知っておく必要がある。地方では、展覧会、演劇、舞踊、音楽会等はほとんどなく、あっても調子をおろしたものである。レコード、ラジオ、美術品の複製などはあるが、要するにもとのままではなく間接的である。文学作品のみが、地方でも都会と全く同じ形で、本ものに接しうる。私がいま京都で読んでいる『アンナ・カレーニナ』は、東北の農村の人々が手にしているのと全く同じ文庫本なのである。ここに文学の大きな強みと同時に、その社会的責務の重大さがある。要するに、人々は文学に面白さを求めており、文学はそれにこたえうるかぎり、人々から愛され、その存在理由を認められる、ということが出来る。そしていかに偉大または深刻な文学も、この原則の例外をなすものではない。

それでは逆に、文学はただ面白くありさえすれば、それでよいのか？ もしそうならば、一つの慰みものであって、一応の必要性は認められるが、非常の時にはゼイタク視され、また時の権力がこれを圧迫ないしあやつることも、やむを得ぬところとせねばなるまい。戦争中、囲碁や将棋の手